

Chapter.1 『少年と魔女』

1

冷たく暗い牢獄。

窓はなく、太陽の光が差しこむことは一切ない。

照明もロウソクの光程度に絞られて、鉄さびと埃の臭いがいつまでも淀んで残る陰湿な空間——それが少女の繋がれた牢獄だった。

カッツ、とこだまする足音。

「誰？」

囚人用のベッドから、少女は反射的に飛び起きた。

ここで足音が聞こえるはずがない。この監獄には看守が存在しないからだ。

無人の監獄——それにはもちろん理由がある。

一つは、三重の遠隔撮影システムによって監獄の内部が完璧に監視されていること。

そして二つめが、この監獄に囚われているのが、この少女も含め誰もが「魔女」・「魔人」と呼ばれる禁忌の者たちであるからだ。

——檻に捕らえていても危険の度合いが高すぎる。

——看守を配置すれば、その看守の命の保証ができない。ゆえに無人。

なのに、この足音は？

誰が、そして何の目的で近づいてくるのだろう。

「……………」

反射的に身構えた。

少女は星の未解析のエネルギー『星霊』を宿して生まれ、魔女という蔑称で恐れられた人間だ。そんな自分に近づいてくる相手が、喜ばしい報せをもたらすわけではない。

個人的な報復？ それとも処刑通告？

半分は怯え、半分は覚悟を胸に秘めながら足音が近づいてくるのを待って——

「しーっ、静かにしてて」

「え？」

目が合うなり「彼」から告げられた一言に、少女は目を見開いた。

「いま外に出してあげるから」

現れたのは少年だった。

乱雑に切った黒褐色の髪をした十代なかばの少年。

帝国兵が身につける戦闘衣を着用し、腰のベルトには一対の双剣——黒と白の鞘に包まれた二振りの剣が取りつけられている。

……外に出してあげるって誰のこと？

檻には一人しかいないのに、少女はその言葉の意味がすぐには理解できなかった。

「動かないで。格子に近づくと危ない」
剣閃。

ただ一瞬の光だけが、少女の目が捉えることのできた光景だった。

牢獄の格子を斬り裂いた。その行為に気づいたのは、粉々になった格子の破片が、音を立てて通路に転がっていくのを目にしてからのこと。

「……うそ」

魔女の星霊術でも碎けない合成鉄鋼。

大型の金属加工機でも用意しなければ切断できないはずの鉄格子を、少年はいともたやすく切断してみせたのだ。

それも、剣一本で。

だが少女が驚いたのはそんな離れ業以上に、牢屋の格子を切断するという彼の行為そのものだった。

「……どうして？」

「どうしてって言われても、この檻を斬らないと君が脱出できないし」

「……わたしを……逃がすの……？」

ひと一人が通れるだけの穴があいた格子を見つめ、少女は目を瞬かせた。

「あなたは帝国の剣士でしょ。それに左腕の腕章は使徒聖……帝国の最高戦力がどうしてこんな場所に」

「よく知ってるね」

剣を鞘に収めながら、暢気ともいえる様子で頷く少年。

「ネビュリスの星霊使いは、帝国の階級まで知ってるんだ？」

「……だって」

顔を伏せる少女。不安と困惑とが混じりあったまなざしで。

「わたしとあなたは敵同士だもの。敵国のこと知ってて当然だから……なのに、わたしを逃がすってどういうことなの」

上目遣いにそう訊ねる少女に。

少年の答えは――

「君、まだ十三か十四でしょ。もっと下？」

「……え？」

「十二歳だったとしたら僕より三つ下だね。あ、もうすぐ四つ下か」

少年の国と少女の国は、百年以上にもわたる戦争が続いている。

拘束された魔女に慈悲が与えられることはなく、捕虜に性別も年齢も関係ない。そのはずなのに。

「拘束された君をたまたま見かけて、気になってた」

「……？」

「星霊使いだって、星霊反応も弱い君みたいな子まで片端から投獄するやり方はどうかと思うから」

「……それが帝国のやり方でしょ」

「うん。だから、こうやってこっそり逃がすしかできない。僕も今回が初めてなんだけど、うまくいったら君以外の子も逃がせるかなって」

牢獄の外から手招き。

「早く。監視設備のシステムは止めてあるけど、たぶん数分で復旧する」

「あ……」

手を握られて、少女は小さく声をもらした。

魔女と呼ばれて忌み嫌われている自分に接する恐怖はないのだろうか？ 怖くなかったとしても嫌悪感はないのだろうか？

「早く。向こうの通路まで走るよ」

手を握られたまま無人の通路を走る。少年に導かれるまま通路を進んで、たどりついたのは獄舎に設置された非常扉だった。

「ここを通れば帝都の外れに着く。あとは人の流れにそっていけば繁華街に出るから、電光掲示板の案内を見て進んで。循環バスに乗って中立都市を目指すというと思う。はいコレ。少ないけど」

軍用非常食である乾パンと、帝国銀貨。それを手のひらに押しつけられた。

ありがとう、とは言えなかった。

あまりにも話が出来すぎて異かと思ったからだ。敵国の虜囚を脱獄させるだけでなく、金銭と食事まで気にかける帝国兵など聞いたことがない。

「さ、行つて」

「……………」

不安に思いながら、それでも「逃がたい」という気持ちに押されて少女は駆けだした。非常扉から監獄の外へ。

帝都のゲートから循環バスを経由して帝国領外へ。そこからさらに同志が集う拠点へと向かって、故郷のネビュリス皇庁へ。慣れ親しんだ自国の空気に触れてから――

「……本当だったんだ」

少女は、あの時の少年の言動が罨でなかったことを知った。

だが翌日。

帝国で起きた異例の事件が、少女のネビュリス皇庁にまで広がることになる。

『史上最年少の『使徒聖』イスカ』

『魔女脱獄手配の国家反逆罪により逮捕。終身禁固刑の処断が下る』

「うそ……」

配られる情報誌を握りしめて、少女は小さく身震いした。

なぜ。どうして、敵であるわたしの為に？

何が彼をここまで突き動かしたのか。その理由がわからないまま、少女はその場に呆然と立ちつくしていた。

――それが『現在』からちょうど一年前。

異例の魔女脱獄事件から一年を経た現在において。

世界は再び、少年の名を思い出すことになる。

黒鋼の後継者イスカ、そして氷禍の魔女アリスの邂逅をきっかけに――

2

『受刑者イスカを、釈放する』

帝国議会――世界最大領土を誇る「帝国」の最高意思決定機関において、一つの議題が議決された。

『顔を上げたまえイスカ。一年ぶりの外界だ。久方の陽を浴びた気分はどうかね？』

「……眩しいです」

両手両足に拘束具をつけた姿で、少年――イスカは天蓋からの日射しに目を細めた。

広大な議会場。

その中心にある壇に立った姿で、自分を見下ろす八人の男女を順に見回す。

八大使徒。

帝国議会を統括する八人の最高幹部。本人たちは議会に姿を見せず、そのおぼろげな顔

の輪郭だけが、正面の壁に設置されたモニターに写っている。

『晴れた面持ちではないようだが?』

「……半分、信じられない。僕は釈放されるんですか?」

『結構。自身が犯した罪の重みは自覚しているようだ。我々が捕らえた魔女を君が脱獄させた事件。あれは大きな痛手だった』

『今回わたしたちは、あなたにその大罪を償う機会を用意したわ』

『どういふことですか』

反射的に眉をひそめる。一年前、魔女脱獄事件の犯人として投獄され、使徒聖の地位を剝奪された時には、終身禁固の投獄だと言い渡された。

……それがどうして釈放?

たった一年での釈放なんて話がうますぎる。目の前のモニターに写る八大使徒はそんな慈悲深い相手では決してない。

『恩赦を与えるかわりに、僕が何かの任務に参加する……?』

『察しが良い。魔女脱獄事件の手筈もそうだけど、頭の回りは悪くないようね』
低く囁い声をもらす八大使徒。

『僕は、剣しか使えません』

『その自己申告はいささか正確さに欠けるな。こう言い換えるべきだろう。剣しか使えないのではなく、剣さえあれば十分だと』

皮肉ではない。世界最大国家の最高権力者たちが、たった一人の少年を議会に呼びだし、直々に命令を下す理由がここにある。

『本題だ。我々が君に命じるものは特別大したものではない。君に、自分の為すべきことをしてもらう。つまりは魔女の打倒をね』

『魔女?』

『ネビュリス皇庁に潜伏させている諜報員からの情報だよ。皇庁が、帝国の拠点に一人の魔女を派遣することを決定したとのことだ』

『それは……前線じゃ日常茶飯事の気がします』

『ただの魔女ではない。大魔女ネビュリスの直系たる「純血種」だ』

『純血種が!?!』

八大使徒が告げた単語に、イスカは思わず目をみひらいた。

『……強敵ですよ』

『だからこそ君を釈放するのだよ』

淡淡と言葉を続ける八大使徒。

「かつて我らが帝国を火の海に変えた大魔女ネビュリス。その血族が代々「純血種」と呼ばれ、強力な星霊を宿していることは知っているだろう？」

「はい。もう何度も戦っていますから」

「今度の相手は、その中でも特に強力な相手だ。氷禍の魔女——一年前、君が獄中にいる間に、ユベル北方前線をたつた一人で突破した。我々の配置していた最新兵器までネビュリス皇庁に奪われてしまったよ」

「……あのユベル前線を一人で？」

イスカが獄中にいた時に、噂だけは聞いた覚えがあった。

とてつもない星霊を宿した魔女が現れたと。

「正面からの戦闘では使徒聖であっても苦戦を強いられるだろう。かといって前線に駐在している部隊では心許ない。そこで君の出番というわけだ」

「史上最年少の使徒聖イスカ、期待しているわ」

「……元・使徒聖ですよ。一年前の事件で降格処分を受けたばかりです」

十五歳で天帝直属護衛にまで上りつめた部隊兵。

異例の昇進として讃えられた英雄になる……はずだった。

「君がその気ならば使徒聖の座とてすぐに取り返せるだろう。なにせ帝国最強のあの男に

師事し、星剣を承継した「黒鋼の後継」なのだから」

イスカの足下の床が割れ、そこから機械じかけで台座がせり上がってくる。

——一对の双剣。

黒鋼の鞘に収まっている剣と、白鋼の鞘に収まっている剣。

「君がああ男から継承した星剣だ。受け取りたまえ」

「いいんですか？」

「この剣は、適格者が振るう時にしか力を発動しない。君一人のための剣だ」と同時に。

イスカを拘束していた手錠と足枷が、音を立てて外れていった。

「イスカ、君は今この瞬間から自由の身だ。前線への護送車両を十七時間後に手配する。

それまでに準備を整えたまえ。必要なものがあれば用意しよう。武装、人材、資金、食料、医療、我々は君にすべてを与える」

すべてを与える。

そんな破格の待遇とも言える提案に、イスカは迷わず即答した。

「部隊に欲しいメンバーが三人います」

「聞こう」

「部隊長にミスミス・クラス、狙撃手にジン・シユラルガン、そして機工士に音々・アルカストーネ。この三人を招集していただけますか」

3

帝都第二セクター。

重厚な鋼鉄の市壁に囲まれた帝都で、もつとも賑わいをみせる商業区域。その広場前の一角に位置するレストラン『火薬基地』で――

「音々ちゃん、ワシらどこに座ればいいんじゃない？」

「音々ちゃん、俺らの頼んだ飯がまだこないんだけど」

「音々ちゃん――」

「はいはい！ いま行くってば！」

厨房の隅で齧っていた昼食のパンを飲み下し、音々はあわてて立ち上がった。

畳んであった従業員用のエプロンを羽織って、大勢の来客で賑わうレストランの客席へと走っていく。

音々・アルカストーネ――

ポリユームのある赤髪を結わえたポニーテールと大粒の青の双眸、そして朗らかで快活

な笑顔が印象的な十五歳の少女だ。健康的に引き締まった肢体に、運動用のタンクトップと太股が露出したホットパンツというスポーティーな嗜好がよく似合う。

「はいはい、お客様お一人で……………あつ！」

レストランの入り口に立つ銀髪の少年。

その姿を見るなり、音々は声を弾ませて彼のもとへと駆け寄っていた。

「ジン兄ちゃん!? わわっ、嬉しいな。音々に会いに来てくれたの？」

「ついこの前も会ったばかりだろうが」

「えー？ じゃあお客様として？ それならあと一時間くらいするとお客様も減っていない感じにお店が空くよ。今日の日替わり定食は、ええと」

「あいにく食事は済ませてきた」

上目遣いの音々に、こちらは淡々と醒めた口調で返す少年。

ジン・シユラルガン。

逆立てた銀髪に、鋭利な灰色の双眸と精悍な面立ちをした少年だ。光学繊維を編みこんだ灰色の戦闘衣に身を包み、左肩には狙撃銃入りのトランクケースを担いでいる。

「じゃあ今日はどうしたの？」

「伝言だ」

「へ？」

「アイツが釈放された。今、一年ぶりに寮に戻って大急ぎで支度してる」
ジンが口にした言葉に、音々はしばらく視線を宙にさまよわせ、そして。

「……あ！」

何かを思いついたように目を輝かせた。

「それってまさか」

「イスカだ」

「うそおおおつつおつつ!! え、ホント? 嘘じゃないよね?」

レストラン中に声が響くのも忘れて絶叫してしまう。

「喜ぶ暇があれば準備しろ」

「そっか、準備ってお祝いの準備でしょ?」

跳びはねて喜ぶ音々に、けれどジンは無愛想な声音を変えないままで。

「明日の朝ゼロ時発だ。護送車で前線に向かう」

「……へ? 護送車両? 前線?」

「出兵だ」

「え!? ちょっと待ってジン兄ちゃん! 音々ちようど夜までアルバイトだよ!」

「諦めろ。お前がまともな仕事につくのは夢のまた夢だ」

溜息にも似た息をついて、ジンがさっと背を向ける。

「帝国とネビュリス皇庁が、このろくでもない戦争を続けるかぎりはな」

帝都軍用ゲート。

薄墨色に染まった夜の帳が帝都に降りるなか、監視塔の照明が正面の大ゲートを眩しく

照らしたす。

そんな地上からふと見上げた空には、うつすらと星明かりが瞬いていた。

「寒っ」

首筋をなぞる夜風に身をふるわせる。

「……朝陽もそうだったけど、こんな星空を見るのも一年ぶりだなあ」

風よけに戦闘衣の襟をそばだてて、イスカは小さく苦笑をこぼした。

もう朝陽も夜空も見れないと思っていた。

「外に出たところで命がけの戦いが待ってるだけだから、獄舎で一生を過ごす方が安全で良かったって後悔するかもしれないけど……っさ!」

背負っていたバックパックを護送車の荷台に放り投げる。

どしんと迫力ある音が響くが、イスカの荷物はこれでも軽量な部類だろう。

武器は手持ちの剣のみで、あとは医療品や小型の通信設備。狙撃手はこれに自前の銃と大量の弾薬が加わり、情報官は大型の通信機器を背負うことになる。

「ええと今——」

「集合時間まであと四分三十秒だ」

イスカが振り返った先に、街灯に照らされて浮かび上がる銀髪の少年の姿。

左肩にトランクケースを背負った狙撃手だった。

「や、ジン。昼間は助かったよ。音々とミスミス隊長に連絡してくれて」

「お前の急な話は慣れっこだ。一年前、お前が一人で勢いあまって魔女脱獄事件を引き起こした時みたいにな」

「うっ……だ、だからそれは今朝も謝ったじゃん」

「ツメが甘い。『何をするにも確実に成功する手段で。確実が見込めないなら時を待て』。

師匠にあれほど言われてたのにな」

おおげさに溜息をついて、ジンが荷物を車内に放り投げる。

「お前が逮捕された時の二人の動揺っぷりは、もうこの世の有様じゃなかった」

「音々とミスミス隊長？」

「そのぶん釈放の報せに喜んでたけどな。ほら、噂をすれば」

ジンが視線で示す先から、凄まじい勢いで近づいてくるヘッドライトの輝き。それは、濛々と砂煙をあげて走ってくるバギーだった。

兵の多くが寝静まった夜に響きわたるブレイキ音。

「イスカ兄、釈放おめでと——つ！」

バギーが停車するより先、赤髪をポニーテールに結わえた少女が車から飛び出した。

「おめでととおめでととおめでと——つ！」

「音々!!」

抱きついてくる音々を受けとめる。

「そんな大喜びされても……そりゃあ心配させて悪かったとは思ってるけど」

「ううん、イスカ兄は悪くない。それよりよかったよ」

ぐすんと涙を浮かべて上目遣いに見つめてくる音々。

「音々がイスカ兄のことどれだけ心配したかわかってる!? 一か月は食事も喉を通らなくて、三キロは痩せたんだから」

「その反動で、焼き肉やケ食いして五キロ太ったくせに」

「ジン兄ちゃん何で知ってるの!？」

「はそつと口にするジンに耳ざとく音々が振り返る。」

「……あ、隊長も来たみたい。おーい隊長つてば、こつちこつち！」

音々が手を振ったのは繁華街^{はんかが}の方向だ。

深夜にもかかわらず煌々^{こうこう}と明かりが灯^{とも}っている街を背景に、帝国の戦闘衣^{せんとうい}を着た小柄^{こがら}な少女が通りを走って近づいてくる。

「み、み、みんな——つ……はあ……つ、はあ……ご、ごめんね遅^{おそ}れて……」

「……相変わらず走るの遅^{おそ}いな」

呆^もれた様子でジンが溜息^{ためいき}。

背負^おつたりユックが重いのか、はたまた体力不足だろうか。走ってくる少女の足取りは今にも倒^{たふ}れそうなくらいにふらついている。

「ジン、隊長つて相変わらず？」

「変^へわりないな。悪い意味で」
ぼて。

「あ、転^{ころ}んだ」

ぼつりと眩^{くら}く音々。



段差も小石も何もないところで大きく転倒する彼女。それでも立ち上がる——思いきや、なぜか彼女はその場にしゃがみこんでしまつて。

「……ぐすん。ごめんね……アタシ、なんでこんなに運動音痴なんだろう、いつも部下にも上司にも怒られてばかりだし。私、やっぱり軍隊って向いてないのかな。ねえ電柱さん。電柱さんもそう思う?」

なんと少女は、目の前の電柱に向かって話し始めた。

「……隊長辞めようかな」

「辞めるなああああつ?!」

思いきり不穏な発言を口にする少女へ、大慌てで駆けよるイスカ。

「帰っちゃダメですよ隊長! ていうかここまで来て挫折しますか普通!」

「あ、イスカ君だあ」

イスカの呼び声に、小柄な少女がさつと表情を明るくした。

音々よりも小柄な背丈に、子供っぽい愛嬌と笑顔にあふれた面立ち。色素の薄い青色の髪はゆつたりと外向きにウェーブがかかつていて、血色の良いこぶりな唇といい、幼げで愛らしい印象に満ちている。

「わあ、すごい久しぶり。背、少し伸びたんじゃない?」

「そ、そうですか」

「うんうん。アタシも背を伸ばしたくて毎日ミルク飲んでるんだけど、やっぱりアタシみたいな女の子じゃ身長も勝てないなあ」

「なにが女の子だ。もうそんな歳じゃねえくせに」

「な、何をいうのジン君!」

さりげなく会話に混じってくるジンに眉を上げる小柄な少女……いや女性。

ミスミス・クラス部隊長——十五歳の音々よりも年下に思えるが、実は彼女こそ一番の年長者である。

「アタシまだ二十二歳だしー。昨日だって映画館は子供料金で通れたんだから!」

「……隊長、そこは素直に大人料金で観ませんか?」

「ああ、だけど嬉しいなあ」

ほろりとこぼれた涙を指先でぬぐうミスミス。

「イスカ君は相変わらず素直で良い子だし、音々ちゃんはますます可愛く綺麗になつて、ジン君の口の悪さも今日だけは懐かしいよ」

「おい待て——」

「防衛機構Ⅲ師・第九〇七部隊、一年ぶりに再結成だね!」

何か言いたげだったジンには気づかず、ミスミス隊長が元気に拳を振りあげた。

「それでそれで？ いきなり出兵命令が来たけど、今回はどんな任務なの？」

「魔女討伐。防衛機構Ⅲ師なんてソレしかないだろ」

「え？」

ジンの簡潔な答えに、ミスミスがたと動きを止める。

「標的は大魔女ネビュリスの直系『純血種』——氷禍の魔女って言えば隊長もわかるだろ。

ここ最近になって現れた大物だ」

「氷禍の魔女おっ!？」

叫ぶやいなや、顔を真っ青にしてぐくぐくと震えだした。

「イ、イイ、イスカ君それ本当なの!？」

「はい。どうも僕が釈放された理由が、その星霊使いを捕まえるためらしくて」

「……あちゃあ」

部隊長の少女が頭を抱えてしまう。

「イスカ君、それ、八大使徒にはめられたんだよ……」

「どういうことです？」

「そもそも氷禍の魔女ってイスカ君が投獄された後に現れた星霊使いだから、イスカ君が

知らないのも当然だよね」

緊張をはらんだ表情でミスミスが言葉が続ける。

「最初に現れたのはユベル北方前線だったかなあ。あの前線をたった一人で破って無傷で帰還。三か月前にヴィリル平原に現れた時は使徒聖が派遣されたけど、それでも捕らえることができなかったって。まだ情報は少ないけど、歴代の星霊使いでも最上位の強さって噂なの。ね、ジン君？」

「だが逆に、向こうもイスカっていう兵士を知らない」

狙撃銃のケースを背負い直すジン。

「幸か不幸か、お前の情報はネビュリス皇庁にもほとんど伝わってない。使徒聖に上がったものの、一度も戦場に行かないまま下級兵に降格したからな。向こうからすれば単なる雑兵でも、蓋を開けてみれば使徒聖級の強さで襲ってくることになる。つまり——」

「油断をつける？」

「っていうのが八大使徒の思惑だろう。とはいえ一度は投獄したお前に縋るわけだから、お偉方としても本気で手を焼いてるんだろな」

「氷禍の魔女か……」

吹きすさぶ風に背を押されるかたちで、イスカは護送車の後部座席へ乗りこんだ。

「イスカ兄、もう出発する？」

意気揚々と運転席に座るのは音々だ。

片手で操縦桿を握りしめ、もう片方の手で通信用の機器を掴みとる。

「こちらⅢ師・第九〇七部隊。出発しまーす！ ほらミスミス隊長も乗って乗って」

「わわっ、待つてよ音々ちゃん！」

動きだす車両に慌てて飛び乗る部隊長。

「イスカ君、は、本当にこの任務やるの……？」

「もちろん。僕にとつてもこれは機会だから」

猛烈な速度で帝国寮の出口を抜けて、装甲車が砂地の車道を進んでいく。

二重ガラスになった窓から帝都の明かりをぼんやりと見つめながら、イスカは小さく、だが確かな決意をもって頷いた。

「……イスカ君もしかして、この任務に失敗したらまた投獄されちゃうの？」

「それは考えないようにしてます」

控えめにたずねるミスミスに、微笑笑。

「このどうしようもない戦争に終止符を。一年前も今も、僕が考えてるのはそれだけです」

4

およそ百年前。

単一要塞領域「天帝国」――

通称「帝国」と呼ばれる大国が、世界の覇権を握っていた。

高度機械化文明とともに繁栄した帝国は、だがある日「星の秘密」に触れてしまった。

地質調査部隊が地下深くで発見したソレは。

――星の深部から噴きだす未解析エネルギー、『星霊』。

ソレがなぜ星の内部に眠っていたのかは現代でもわかっていない。ただ確かなことは、星霊が人間に憑依する性質を持っていたことだ。

最初は、星霊の噴出を浴びてしまった地質調査部隊が。

それに続いて、星霊を研究していた研究者が。

星霊を宿した人間には身体の一部に正体不明の痣が生まれ、それと共に、まるでお伽話にある魔法さながらの法力が宿った。

不気味な痣と、超常の力。

……怪物だッ

星霊を宿した少女や女性は「魔女」、少年や男性であれば「魔人」。その強大すぎる力に怯えた帝国の民衆が、星霊を宿した者たちへの迫害を開始するまで、時間はさほどかからなかった。

だが一方、迫害された者たちの間でも帝国に対する憎悪が膨れあがっていった。帝国への反旗。

最強の星霊を宿した少女——大魔女ネビュリスが帝国を火の海に変え、星霊を宿した者だけが住まう新たな国家『ネビュリス皇庁』を建国したのだ。

星霊を危険視し、魔女・魔人を根絶せんとする帝国。

星霊を人類の新たな可能性と諷い、かつて祖先が受けた迫害への復讐という執念に取り憑かれたネビュリス皇庁。

世界二大国の争いは、百年後の現代でも鎮まる気配を見せていない。

「——アリス様」

控えめな仕草で肩に触れる従者の手に、金髪きんぱの少女はふと我に返った。

「大丈夫ですか。何かお具合でも？」

「ううん。ごめんなさい、少し考えごとをしてただけ」

吹きすさぶ突風とつふうになびく横髪よこがみを手でおさえつけて、従者の少女へと振り返る。

アリスリーゼ・ルウ・ネビュリス9世——

王衣ドレスを羽織った見目麗しい少女だった。

陽光に輝く金髪は絹糸のように風に流れ、紅玉色ルビーの双眸そうまうは凛々しく力強い。

その肢体は白磁のように白く透きとおおり、整った目鼻立ちと、血色のよい唇や頬の紅色が気品ある色気を醸しだしている。

「ありがとう燐。ちゃんと集中しないとダメよね」

「いえ。アリス様にもお考えがあつてのことでしょうし、問題ありません」

微笑笑で応えるのは、明るいつ茶髪を左右にわけて結んだ少女——燐だ。

燐・ヴィスポーズ。

ネビュリス王家に仕えてきた従者の一族にあたる少女。皇庁の姫であるアリスの側近であり、唯一の親しい話し相手でもある。

「あとどれくらいかしら？」

「国境は越えました。あとは戦地へ向かうだけです。半刻とかかりません」

高度二千メートル。

アリスと燐が乗っているのは一羽の巨大な怪鳥だ。怪鳥が羽ばたくたびに風が吹きあれ

て、アリスの髪と王衣ドレスを大きくなびかせる。

「帝国の長距離射撃にいつ狙われるかわかりません。お気をつけて」

「もう慣れたわ」

余裕よゆうすらうかがえる言葉とは裏腹に、アリスは無言で唇を噛みしめた。

「もう慣れっこよ……銃で狙われるのも、『水禍の魔女』って罵られるのも」

大魔女ネビュリスが建国したネビュリス皇庁。アリスは現女王の次女にあたる歴とした王位継承権者である。

と同時に、十七歳にして皇庁の切り札と謳われる星霊使いだ。

帝国では魔女・魔人という蔑称が使われているが、アリスの祖先は帝国からの独立後、自らを星霊使いと呼称するようになった。

「燐、わたしの狙いはいつも同じ？」

「はい。帝国が設置している前線拠点の破壊です」

左右のおさげを勢いよくなびかせながら、燐。

「前線で戦っている同志から、帝国が新型の兵器動力炉を建設中との情報を受けています。完成してしまうと、中距離程度の射程をもった兵器が一方的にこちらの拠点まで届いてしまい、後退せざるを得なくなります」

「完成する前に壊すのは簡単だけど……いっそ、このまま帝国領内に攻め入っちゃうのはダメなのかしら。わたしとあなたなら楽勝なのに」

アリスにとつての不満のタネだ。

星霊使いの中でも特に強大な星霊を宿し、一人でも戦況を左右できる力がある。なのに女王である母がアリスに与える命令は、敵の拠点を破壊し、破壊後は速やかに帰還せよというものばかり。

「なんでお母様は、わたしの突撃を認めてくださらないのかしら……わたし、もう一人前の星霊使いなのに」

「アリス様がそう仰るのを、女王様はすごく心配しましたよ」

ふっ、と口元に手をあてて笑う燐。

「アリス様は将来の女王候補なんだから。本当なら敵陣への突撃ではなく帝王学を学ばれるべきなのです。戦いの合間にお芝居やコンサートに足を運ぶんじゃないくて、城で勉強に努めてほしいといつも言われているではないですか」

「あんな退屈なゴメンよ。帝王学なんて世界が平和になってから勉強すればいいの」

「もちろん、その考え方も一理あると思います」

「そうでしょ？」

うなずく隣に微笑で応じる。

だがすぐに口元の微笑みをぬぐい去り、アリスは強い意志を秘めた口調で宣言した。

「まずは帝国打倒よ。わたしがあの国を倒して、誰も迫害を受けない世界を作る」

赤土が広がる平野。

その先に、地平線を埋めつくす広大な森林が見えてきた。

5

ネウルカの樹海。

帝国とネビュリス皇庁の境界線にあたる。

その特徴は、高さ三十メートルにまで成長するネウルカの樹。

百年前から続く戦争で世界の森林の十五パーセントが焼失したと言われるなか、戦火を免れてきた稀少な樹林帯でもある。

「……ふわあ、大きな樹だねえ」

空を衝くように伸びるネウルカの樹を仰ぎ、ミスミスがぽかんと口にした。

「こんな大きな樹、アタシ初めて見るよ」

「ミスミス隊長、前に僕とこの基地に来たはずですけど。別の作戦で」

「あれ、そうだった？」

首をかしげる青髪の童顔女性に、イスカは首を傾げてみせた。

「まさか忘れちゃったんですか。あの時の作戦すごく苦労したのに」

「え!? あはは……そ、そんなことないよ。アタシだって任務で来た場所くらい覚えてるもん。いやあ懐かしいよね。このシユヴァルツ平原」

「名前ちがうしっ!? この森のどこが平原ですか!」

「じよ、冗談だって! もちろん完璧に覚えてるから!」

「……すっごい不安」

「へいきへいき。アタシに任せておきなさいってば!」

口元を引き締める隊長。

「ところでイスカ君、アタシ早速これが気になってるんだけど」

緊張ぎみに彼女が見つめる先には、けたたましい駆動音を響かせる機械炉があった。

兵器動力炉。

外見は、巨大な焼却炉に酷似しているだろうか。

帝国の部隊が所持する大量製造品の重火器とは別に、帝都の研究室で個別に設計され、特殊製造される破壊兵器——それを動かすためのエネルギー供給源だ。

「これ新品だよな？」

「そうだと思います。僕たちが前に来たときにはこんな物なかったから」

ミスミスの隣で動力炉をじっと見上げる。

ネウルカ戦略基地。

この樹海に設営された拠点である。

ネビュリス皇庁が星霊部隊を配置する前線までわずか三千メートルという位置にあるが、まわりの巨木のおかげで拠点の存在を隠すことができる。

「なんでだろ。こんなに大きな炉があるのに配置部隊が少ないよ？」

蒸気を放出して駆動を続ける動力炉。

その周りにはテントと通信拠点。慌ただしそうに通りすぎていく部隊の姿があるものの、ミスミスが言うように戦略基地としては人が少ない。

「ああ、それはきつと——」

イスカが言いかけた矢先。

「ただいま戻りましたあっ！」

大樹の間から、赤髪を結わえた少女がひよつこりと顔を出した。

「わっ！……ビックリしたあ。音々ちゃん脅かさないで」

「護送車の引き渡し完了したよ。あと向こうのテントでこの指揮官さんも発見。挨拶がてらお話ししてきたんだけど、この炉ね、未完成なんだって」

音々が、コンコンと動力炉の外装を叩いてみせる。

「まだ実験段階だから音がすごいもんね。本当だったら完成してるはずだったんだけど、最近では襲撃してくる星霊使いが多いせいで、動力炉の完成より前線の防衛に人数を割いてるんだって。拠点にいる人が少ないのもそういう理由みたい」

あどけない瞳の奥に知的な輝きを灯す少女。

超一級の機工士でもある音々は、士官学校に配属される傍ら、果てなき研究心によって次々と論文を発表し、帝都の制圧兵器開発部局から異例のスカウトを受けている。

イスカとジンと一緒に部隊を組む——

その要望さえなければ、今ごろ音々は帝都の専任開発者になっていただろう。

「もともと変だと思ったの。この動力炉、駆動中にしたって振動にブレがありすぎるし、駆動音にも雑音が入ってたから」

「へえ、さすが音々ちゃん」

「あとは排気口から漏れてる蒸気の色と臭い。加圧装置が稼働しているのに制御リングがほとんど上限いっぱいまで固定されてるし、七つの制御ランプのうち三番目と七番目が同時

点灯してるのも正常稼働の時には不自然で。極めつきは——」

「……も、もういいよ音々ちゃん？」

留まることを知らない音々を鎮めるミスミス。

そんな二人の横で。

「……………」

「イスカ兄、どうしたの？　じつとしてて」

不思議そうに尋ねる音々に、イスカは目の前の動力炉を視線で差ししめした。

「これが完成すると、またたくさんの星霊使いが傷つくのかなってさ……」

星霊の力は、通常の人間からすれば魔法に等しい。

その性質や能力は千差万別だが、強力な星霊になると帝国部隊が有する銃器が歯が立たないことも珍しくない。そういった星霊使いに対抗するための兵器であることはイスカもわかっているのだが……

「悪循環だ」

そう言ったのは、肩に狙撃銃を担いだジンだった。

「帝国が動力炉を作る。それを破壊しに皇庁が襲撃してくる。こっちが倒れる。反撃用にさらに強力な兵器と動力炉を開発する。星霊使いが倒れる。百年間その繰り返しで世界は

成り立ってきた。……つてのは、師匠の受け売りだけだな」

一度大きく溜息。

「戦争のキツカケが何であれ、今もこの戦争が長引いてる理由つてのは最終的に感情論だ。ここまで長引くと誰もこの戦争を理屈じゃ止められない。恨まれ役を買ってでも、誰かが無理やり断ちきる以外にないんだよ」

「断ちきる、か……」

「誰かさんの考える和平交渉もその一つだな。出来る出来ないは別として」

音々の前を通過するジンがびたりと足を止めた。
自分の前で。

「今さら言うまでもないが、ネビュリス皇庁つてのは大魔女ネビュリスの子孫が女王になる国だ。理由は、その王家の血脈がいつもこいつも強力な星霊を宿してるからって推測されてる」

星霊使いの頂点とされるのが、大魔女ネビュリスの直系だ。

ネビュリス王家の一族は他の星霊使いと比較にならないほど強大な星霊を宿すことが多い、帝国議会が「純血種」と呼んで特別な警戒を行っている。

「その純血種を捕獲する。まあ普通は考えつかないよな、隊長？」

「う、うん……難しいよね……たぶん他の星霊使いを十人捕まえるより難しいから」
 「十人どころか千人捕まえるより難しい」

おずおずと答える隊長の言葉に、さつと首を横にふる狙撃手。
 「百年続くこの戦争で純血種を捕らえた記録が一度としてない。歴代の使徒聖でさえ追いつくので精一杯。それくらいネビュリスの血族は桁違いに強い」

「だからこそ——」

ジンの言葉に続けるかたちで、イスカは小さく頷いてみせた。

「純血種を捕まえられれば、ネビュリス皇庁も和平交渉に応じざるを得ないと思う」
 「もう千回は聞いている」

十年來の友人の応えは、呆れ混じりの溜息だった。

「現状、帝国もネビュリス王家も和平なんて頭がない。だったら向こうの要人を捕らえて、それを脅しに強制的な和平交渉に持ちこめばってのがイスカの発想だな」

「……でもジン君？」

不安そうな口ぶりで言葉をはさむ部隊長。

「もし純血種の魔女を捕まえたら帝国が有利な立場になるでしょ。八大使徒がそんな甘い交渉を提示するとは思えないの。対等な和平どころか全面降伏じゃなきゃ人質を処刑する、

くらい言ってもおかしくないよ？」

「だからイスカが、自分で純血種を捕まえずにやいけないんだよ」

二国ができるかぎり対等になる和平条件。

それを八大使徒が提示しないのなら、捕まえた純血種を脱獄させる。

「一年前の魔女脱獄事件って実例があるからな。イスカの場合は魔女を脱獄させるぞっていう脅しが冗談に聞こえない。つか、隊長にこの説明でこれで何度目だ？」

「あ、あはは……ごめんね、アタシ物覚え悪くって」

腕組みするジンに見つめられて、ミスミス隊長がごまかし笑い。

「部隊長としても星霊使いを捕らえるって目標は異議なしだよ。……純血種はちよつと恐いけど」

「イスカ兄は一度決めたなら頑固だもんねー」

音々が背中にぎゅつと抱きついて。

「でも平気、音々がちゃんとイスカ兄のこと守ってあげる！ イスカ兄が危ない時には、音々がちゃんと後方支援を——」

「ほら行くぞ音々。イスカとのお嫁さんごっこは帝都に戻ってからしろ」

「あ痛っ!? ちょっとジン兄ちゃんてば！」

音々のポニーテールの先っぽを掴んで前へと歩いていくジン。

「ポニーテールが千切れちゃうよ……」

「千切れねえよ。人間の髪の毛は同じ太さの銅線よりも頑丈だ」

「そんなムダ知識聞いてないもんっ!」

頭頂部のあたりを押さえながら洪々と歩きたす音々。

と、隊長のミスミスが二人を呼び止めて。

「ジン君待って! まだ前線の部隊と連絡がついてないの。勝手に動いたら前線の部隊に怒られちゃうよ」

「もう終わってる。どっかの誰かさんが兵器動力炉を眺めてる間にな」

「早っ!」

「昨日今日と交戦はない。前線の狙撃チームが星霊部隊の斥候を何回か見かけてるけど、氷禍の魔女らしき人物はいないらしい、だそうだ」

「……ホントに来るのかな?」

「近いうちにまた動力炉を狙って奇襲を仕掛けてくる可能性はある」

樹海のなかを徒歩で進んでいくジン。

その爪先の方角に見えるのは、樹海の茂みに隠された軍用車だ。

「前線部隊の方じゃ『増援を歓迎する。すぐに合流を要請する』だとさ。それだけ氷禍の魔女を警戒してるんだろ。イスカ、氷禍の魔女が純血種だっていうのは?」

「間違いないと思う。八大使徒が断言してた」

君に、自分の為すべきことをしてもらう。つまりは魔女の打倒をね

々ただの魔女ではない。大魔女ネビュリスの直系たる「純血種」だ

「至難だろうけど、氷禍の魔女を捕まえれば和平交渉のネタには十分だと思う」

「つてわけだ。音々、車を出せ。前線に合流する」

「じゃあ出発するよ!」

ジンの一声に領いて、運転席の少女がシフトレバーを握りしめた。

と同時に、猛烈な速度で回転を始める大型タイヤ。大樹がところ狭しとそびえる森道を、四人乗りのオーブンカーが凄まじい勢いで走りだす。

「きやうんっ!」

子犬のような悲鳴をあげて、ミスミス隊長が助手席で器用に転がった。

「音々ちゃん音々ちゃん!? も、もっと安全運転で!」

「だいじょーぶだいじょーぶ。音々、こんなの片目を閉じててもへっちゃらだよ」

「お願いだから目を開けて——っ!？」

ネウルカの大樹と茂みで視界が悪いうえに、突きでた木の根のせいで地面も凹凸だらけ。そんな道なき道で車を暴走させるのだからミスミスが慌てるのも無理はない。

「や、やっぱり久しぶりは緊張するね……ちゃんと指揮できるかなあ」

「不安ばかりは仕方ねえよ」

後部座席で、頬杖をついて口早にそう告げたのはジンだった。

その鋭利な眼光で樹海の奥を睨みつけたまま。

「イスカは投獄のせいで身体が鈍ってる。俺も部隊から抜けてたし、音々だって半引退で生活資金をバイトで稼いでた身だ。実戦の勘が抜けてる。こんな病み上がり同然の状態で、はたして氷禍の魔女と戦えるかどうか——だろ？」

「……う、うん」

「頼りにしてます。そんな時こそ隊長の腕の見せ所だから」

前座席の女性隊長に、イスカは力強く頷いてみせた。

「僕もジンも音々も厳格な隊行動は苦手だけど、ミスミス隊長は別です。規律を保ちながらも隊員の判断を信じてくれるから」

「そういうこった。まあ見とけ。星霊使いとの戦闘は俺らに任せて、あんたは後ろで命令だけしてればいい」

「ジン君、イスカ君！」

隊長がぐすんと目の端の涙をぬぐいとる。

「アタシ嬉しいよ。二人ともすっかり大人になって……特にジン君、たった一年間でこんなに優しい子になったんだね！」

「やる気出した隊長に銃を乱射されても困るだけだ。味方の弾で死ぬリスクを負うよりも、隊長には後ろで指示だけさせてた方がいい」

「むき——っ!？」

助手席からジンに襲いかかろうとするミスミス隊長。

と、そんな一連のやりとりを見ていた音々が楽しげに運転席からふり向いて。

「ジン兄ちゃんてばそんなこと言っちゃって。部隊が解散して隊長が落ちこんでるから、音々に『あのバカを焼き肉にでも連れて行って元気づけてこい』って言ったの、ジン兄ちゃんだったよね」

「え、そうだったの？ でもバカってひどくない!？」

「さあな。そんなことより音々、前見て——」

前を見て運転しろ。そう言いかけたであろうジンが言葉を閉ざす。
そして。

「跳べ！」

後部に立つイスカとジンは、同時にそう叫んでいた。

「え!? えっ!?」

「隊長つかまってね」

ミスミスを抱きかかえて運転席の音々が車から跳躍。

右の座席からは狙撃銃を抱えたジンが脱出。そんな一連の動きを見守って、イスカは左の座席から跳躍した。

直後。

強固な装甲を施した軍用車が、真っ赤な炎に包まれた。

「ネビユリスの星霊部隊か？」

空中で身をねじって旋回。背中のベルトに固定した二対の剣を抜きおえた状態で、イスカは地面に膝をついた。

続いてその後方に着地する音々とミスミス。

「そんな!? ここまだ帝国の陣地だよっ！」

「前線の防衛が突破されたんです。たぶん強力な星霊使いがいる。——音々」

「イスカ兄、通信きてる！」

手のひらサイズの通信機を耳元にあてる音々。

「ネウルカ陣営の通信チームより、全部隊への援護要請！」

「……時間かけてられねえな。こっちの奇襲もそうだが、前線で食い止めないと星霊使いの大部隊が怒濤の勢いで攻めてくるぞ」

着地したジンが、肩に担いだ銃の安全装置を解除。

その背後で茂みが大きくゆれた。

「ジン、後退！」

同時だった。ジンの後方から巨大な炎の壁が迫ってきたのと、そしてその紅蓮の壁を、イスカの黒鋼の剣が真っ二つに両断した瞬間か。

「……星霊の炎を斬り裂いただよ!!」

男女二人組の星霊使いが茂みから飛びだしてくる。

ネビユリス星霊部隊。

金属繊維を編みこんだ白銀の装束。短時間ならば機関銃の一斉射撃にも耐える代物だ。銃が有効的は一センチにも満たない装甲の継ぎ目のみ。それを外せばジンの狙撃銃で

も効果は薄いだろう。

「せ、星霊使いが二人!? みんな気をつけて!」

「二人つてのは見りゃわかる。それと俺らに注意を促すより自分のことを心配しろ。あとわざわざ指令を声に出すな、誰が隊長か一発でバレる。おまけに——」

「そんな怒濤のツツコミいらないよ!!」

「なら黙って下がってろ」

半分涙目なミスミスを後目に。

目の前、十メートルにも満たない距離から星霊使い二人に銃を向けるジン。ミスミスが次の言葉を発するより先、ジンは迷わず銃把を引いていた。

至近距離で花開く銃火。

にもかかわらず星霊使い二人は微動だにしなかった。

——空中停止した弾丸。

時間が止まったかのように虚空に留まり、そのまま数秒後、与えられた運動エネルギーの全てを消費した弾丸がゆっくりと地に落下する。

「だと思ったよ。銃を向けられて余裕な表情してるわけだ」

微動だにしない男を睨みつけるジン。

「てめえは仲間の盾つてか。風の星霊の亜種だな? 空中停止した銃弾がわずかにブレて

た。圧縮された空気の壁に弾丸が弾かれた時の現象だ。で、ソッチの女が炎の星霊だな。

俺たちの車をボンコツにしてくれたと」

無言で佇む星霊使い二人。

そう、これが帝国において「魔女」「魔人」と恐れられる超常の者たちだ。

帝国のビル一つを崩壊させる圧倒的な威力を有する星霊から、銃弾の雨さえ無効化する鉄壁の防御を誇る星霊まで。ネビュリスの星霊部隊は、たった一部隊でも帝国前線を崩壊させる力を秘めている。

「寂しいわね。帝国の応援部隊はたった四人だけ?」

フードを目深に被った女が、唇を冷笑のかたちにつりあげた。

「さ。とっとと片付けて次の部隊を仕留めに行くわよ」

地面が蠢いた。ポコツという音を立てて地面が陥没し、そこからネビュリスの星霊部隊

が次々と地中から這い上がってくる。

「降伏か全滅か好きな方を選びなさい」

「え? ど、どうして……いつの間にこんな!」

八方を取り囲む八人と、目の前の二人。総勢十人という敵勢力の登場に、表情を青ざめ

させたのはミスミスだ。

「ジン君、イスカ君！」

「あー……地系統の星霊か？　なるほど、地面に潜つてりや気配も何もないもんな」

「大がかりな術式だね、かなり強力な星霊使いがいる」

「なんで二人ともそんな余裕なの!？」

「想定すべき事項だからだ。――イスカ」

あつさり答えるジンがわずかに目配せ。

「八大使徒に没収された星剣、その握ってるのは偽物じゃねえよな？」

「本物。触ればわかる」

「で、全部斬れるか？」

「勘が戻れば。今はまだちょっと厳しい。つてわけでおとなしく力を借りるよ」

両手の剣を構えた姿勢でイスカは一步後ずさった。

それに応じて前に出る少女に向けて。

「音々」

「位置情報、輸送完了――」

掌をまっすぐ空へと向けるポニーテールの少女。



その小指に機械仕掛けの指輪が嵌められている、と。星霊部隊が察した時には、すでに砲火は始まっていた。

「衛星『テトラビプロスの星』より、対星霊擲弾を射出」
降りそそぐ擲弾。

ネウルカの樹の上空で弾丸が破裂するや、強烈な光と衝撃波を撒き散らし、さらに地表の砂埃を巻き上げた。

「なっ……!？」

頭上からの不意打ちに、星霊使いたちが膝をつく。

天を浮遊するこの衛星は、帝都の制圧兵器開発部局が過去に射出し、機工士である音々が実驗用として預かり受けたものだ。

——対星霊兵器。

星霊の動きを乱す波長を、二秒間、半径三十メートルにわたって展開する。

そして、その二秒のうちにイスカは動いていた。

「右、五人」

ジンに向かってそう叫ぶや左に旋回。今まさに自分たちを包囲していた星霊使いの懷まで一息で距離を詰める。

「帝国の一兵がつ！ たかが……こんな策を凝らしたところで！」

怒号を発し、立ちこめる砂埃から星霊使いが飛び出した。

露出した肘に真紅の紋が浮きでた男。

星紋——星霊を宿した者の証だ。星紋が浮かびあがる部位には個人差があり、強い星霊を宿すほど星紋は大きく複雑な形状を描くという。

この不気味な痣も、帝国で魔女・魔人という蔑称で呼ばれる理由の一つである。

「しかも銃も持たずに？ 正気か!？」

それに答えず、さらに前へ。

歩法。極限まで鍛え上げられた体幹の筋力と平衡感覚が、両手に剣を携えながらも一切速度を落とさない踏みこみを可能にする。

「貴様！」

瞬時に剣の間合いまで接近したイスカの前に、男の星霊使いが身構えた。

イスカの疾走から逃げられない。それを瞬時に悟ったのか、星紋を宿した右腕を大きく振り上げて迎撃の構えへ。

——煌々と輝きだす真紅の星紋。

男の右腕のまわりに、赤くちらつく火の粉が生まれた。

「猛火の星霊よ……」

「火の系統か」

「爆ぜろ！」

イスカの頭上に生まれた火の粉がまたたく間に凝縮。一抱えはあろう巨大な火球となつて襲いかかる。炎を浴びて倒れるイスカ——炎の魔人が脳裏に描いたその未来は、仲間の魔女の悲鳴によってかき消された。

「だめよ！ 後ろ——」

「……っ……………」

だが警告は遅かった。

無言で倒れていく男の星霊使い。

「炎系統の星霊は、帝国にとって脅威となる星霊の一つだ。戦闘衣を燃やすうえに武器庫の火薬や兵器に引火する。だけど弱点は『炎を生みだす火種から、炎の規模と射出角度の予測がついてしまう』こと。発動までに射程外に逃げればいい」

男の背後に立つイスカ。

炎が着弾するより先に身体を旋回させて背後をとり、頭部を剣の柄で強襲したのだ。

「発動までに攻撃を感知ですって……そんなの一秒もあるわけが……」

「そういう訓練だけをしてきた」

「っ、来るな！」

首筋に緑の星紋を宿した魔女——女の星霊使いが、怒りの形相で手を前に突きだした。

風の星霊。

一括りにそう区分される星霊であっても、精霊の強さで「微風」から「嵐」まで様々だ。

さらには「風の刃」を生みだす「鎌鼬の星霊」といった亜種まで存在することから、その星霊の正体は実際に攻撃を受けるまでわからない。

だがイスカにとっては。

風の魔女という情報さえ読み取れば十分すぎた。

「風の星霊が生みだす風は不可視。炎の星霊による力の発動とは逆に、その攻撃に対する反応は難しい。だけど」

突きだした手の真横をすり抜ける。

魔女がわずかに瞬きした刹那の際に、イスカは彼女の足下に身を屈めていた。

「風が生まれるまで一瞬のタイムラグがある」

とん……

イスカの放った掌打が無防備な顎先をかすめるように打ち上げた。

「突風が生まれる前に魔女が意識を失う。

宿主である人間からの命令が途絶えたことで、その統制下にあった星霊も沈黙。イスカに届いたのは、力の残滓である微風だけだった。

かろうじて反応できた二人が沈黙。

残る三人は、既にイスカが通りすぎざまに昏倒させている。

「ジン、そっちは」

「終わってる」

後方で、狙撃銃を地に下ろしたのは銀髪の狙撃手だ。

音々が巻き上げた土煙のなか、ジンの背後に倒れた星霊使いがいずれも装甲の繋ぎ目を穿たれて地に倒れていた。

数メートル先も見通せない視界にもかかわらず、だ。

装甲の繋ぎ目など、この視界では見えないに等しかったはず。それを正確無比の精度で撃ちぬく技巧は、もはや魔術めいた奇蹟と言っても過言ではないだろう。

「ふええ……相変わらずだね。ジン君もイスカ君も」

「音々が擲弾を落とす直前までのと睨めっこしてたからな。あとは土煙で隠れようが覚え

た場所に撃てばいい。何なら目をつむって撃つても問題なかった」

銃弾を装填しなおすジンと、それを呆然と見つめるミスミス隊長。

「え？　だって服と服の繋ぎ目だよ。あんな細いの……」

「俺は討伐者だ。それができなきゃ話にならない」

音々の広範囲攻撃で連携を乱した隙に、後方から敵の主力を一撃で仕留めるのが狙撃手たるジンの務め。

問題は、相手にその連携を悟られた場合だろう。

音々やジンが先に狙われた時。あるいは隊長のミスミスが集中砲火を浴びた場合はどうするか。敵の注意を引きつける圈が必要になる。

それがイスカ——単身で星霊部隊に突撃し、三人に向かうはずだった星霊の攻撃を全て自分に向かわせる命知らずの突撃役である。

「一年前だったら、こいつら全部イスカに任せて俺たちだけ先に行くつてもアリだったけどな」

倒れた星霊部隊を見下ろすジン。

「戦闘嫌いの戦闘狂、だっけか？」

「……………」

イスカが昏倒させた五人の星霊使い。

音々の攻撃から逃れた二人の反撃を受けながらも、それさえ意に介さず地に叩き伏せる。それも現代帝国の象徴ともいふべき銃器を一切使わずに、だ。

修羅か、鬼神か。

死さえ恐れず突撃するイスカの戦闘を目撃した星霊使いからの、異名だ。

だがイスカに近しい帝国部隊は、そんなイスカの戦いが、戦争を一日でも早く止めたいがための悲痛の戦であることを知っている。

——ゆえに戦闘嫌いの戦闘狂。

誰よりも戦いを止めたいと願っている。

だからこそ戦地で誰よりも前に出て戦い、星霊使いを片っ端から拘束し、純血種を捉え、それを人質としてネビュリス皇庁に和平交渉を承諾させる。

「誰かが嫌われ者の役をやらなくちゃいけないから、さ……」

支配を目論む帝国上層部からは、睨まれるだろう。

ネビュリス皇庁からも当然に怨敵扱いされるだろう。

「まあ、両方から嫌われるから覚悟しとけて師匠からも言われてたし」

黒鋼の星剣を鞘におさめてイスカはふり返った。その覚悟は、師から星剣を継承した時

からできている。

「ところで隊長、この星霊使いたちはどうしますか」

「うーん……本当はすぐ連行したいけど前線に急がなくちゃいけないし」

地に伏せたままの星霊使いたちを見回すミスミス隊長。

「戦略基地の小隊に運んでもらおうか。音々ちゃんお願い」

「りょーかい。それじゃ連絡しておくね。拘束用の手錠も車の奥に積んでたはずだよ。でも車が燃えてるままだし、取り出せるかなあ」

炎上したままの軍用車へと爪先を向ける音々。

機工士の少女が一步足を踏みだす。その足先を、猛烈な鳴動が襲いかかった。

「っ、きゃあ!？」

小さな悲鳴を上げてミスミスが横転。

先の音々の砲撃さえも上回る轟音、そして地面がみるみるうちに隆起を始める。

……地震。いや違う？

……なんだこの不定期な地面の胎動は。

まるで地中を何かが這い進んでいるかのようなようではないか。

「連行されるわけにはいかないな」

木々の合間を縫^ぬって伝わってきたのは少女の声。
憤怒^{ふんぬ}の感情を滲^{にじ}ませて。

「その者たちはネビュリスの誇^{ほこ}り高き同志たちだ。触^{さわ}るな、帝国の犬どもが」
樹海^{もり}の地面が膨^{ふく}れあがった。莫大^{もくだい}な土砂が意思を持つように集まって人型の像を形作り、
倒れた星霊使^{せい}いたちを庇^{かば}うように立ちはだかる。

「土の星霊^{せい}!」

「……巨人^{ゴイレム}像か。しかも生成速度^{せいせいそくど}が早い」

音々の声、そしてジンの呟^{つぶや}きが漏れる。

「奇怪^{きかい}だな。見たところただの小隊だが、私が駆けつける前に星霊部隊^{せいれいぶたい}をあしらったか」
木々をなぎ倒して現れる土の巨人^{ゴイレム}像。

その肩に立っていたのは、明るい茶髪^{ちかみ}を左右にわけて結んだ少女だった。

ネビュリス皇庁の星霊部隊^{せいれいぶたい}が着用^{しやうぎ}する装束^{しやうそく}ではなく、まるで家政婦^{かせいふ}さながらのエプロン、
それに裾^{すそ}が地面に届きそうなほど丈^{たけ}のあるスカートという風貌^{ふうぼう}だ。

一見すれば、とても戦闘用^{せんとうよう}の衣装とは思えないが……

「息吹^{いふ}け」

少女の声に従って大地が揺^ゆれ、イスカに降りそそぐ日射^{ひざし}しが遮^{さか}えられる。二体目の巨人^{ゴイレム}像。

その巨大^{きょだい}な拳^{こぶし}が、イスカの頭上^{かぶ}めがけて振り下ろされた。

「まず一人」

「イスカ君^{きみ}!」

大地^{かほ}が陥没^{かほつ}。ネウルカの樹^きの根が千切れ飛ぶ視界^{しがい}のなか、振り下ろした巨人^{ゴイレム}像の拳^{こぶし}が、
ピシリツと音を立てて罅^{ひび}入った。

「――隊長」

乾いた音を立てて碎^{くだ}ける巨人の拳。

その手首を瞬時^{しゆんじ}に破壊^{はかい}した黒鋼^{くわう}の剣を手にして、イスカは、巨人^{ゴイレム}像の肩に乗る星霊使^{せいれい}いの
少女と向かい合っていた。

「ここは僕^{おれ}が引き受けます。ジンと音々を連れて合流^{ごうりゅう}地点^{てい}へ。救援^{きゆうえん}を優先^{ゆうせん}してください」
「え……だけど……」

「相当^{しやうたう}に強力な星霊使^{せいれい}いです。四人いても時間を消耗^{しょうこう}するだけだから」

三人に背^せを向け、一対^{いつたい}の星剣^{せいけん}を交叉^{こうさ}して構^{かま}える。

そして部隊長^{ぶたいちやう}の決断^{けつだん}は早かった。

「わ、わかったよ。気をつけて!」

小ぶりの足で精^{せい}一杯^{いっぱい}地面^{じめん}を駆^かけていく。音々とジンがそれに追走^{しゅうそう}。土の星霊^{せいれい}を宿^{しゆく}したと

おぼ
思しき星霊使いは、そんな三人には目もくれなかった。

「追わないのか？」

「追いかけるとも。貴様を片付けて、同胞たちを救出した後でゆっくりと」

冷たき眼光と口調。

それを帝国の一兵に向ける様は、まさしく過去に帝国全土から恐れられ排斥された魔女
まじよ
という存在そのものだ。

「巨人像の拳を切断した技量。なるほど、それで私を一人で足止めできると考えたか」

「だとしたら？」

「うぬばれるな、雑兵が」

背後に蠢く気配。

振り返ったイスカが目にしたものは拳。それも今まさに砕いたはずの拳だった。

「拳が再生した？」

「材料は土だ。再結合を命じるかぎり巨人像は不死身の兵と思え」

だが、イスカが目をみひらいた理由は別にある。

あまりに再生が速すぎる。

土の星霊で干渉すれば巨人の部位再生は可能だろう。しかし現実には、その一言で済む

ような簡単な業ではないはずなのだ。

……大量の土砂をここまで加速させて遠隔操作。

……星霊自体の強さと、それに星霊使いとしての練度の高さが半端じゃない！

前髪すれすれを通過していく巨人の拳。それを刹那の差でかわして後方へ跳躍。そんな
イスカの体さばきを目の当たりにした魔女が、整った顔を忌々しげに歪めた。

「ずいぶんと星霊の攻撃に慣れた動きだな。まさか使徒聖……帝国の最強戦力か？」

「ただの一兵だ」

跳躍した勢いで大樹の幹を蹴りつけて、靴底に付着する泥をぬぐい取る。

「驚いた。こんな一瞬で地面を泥沼に変えるだなんて」

ただ土の巨人像を操作しただけではない。今の一瞬で、この少女はイスカの足下を泥沼
あしもと
へと変えて動きを封じる策さえも打ってきたのだ。

敵の動きを止めて巨人像の拳をあてる――

彼女の策は見事だったが、唯一の計算外はイスカの尋常ならざる体術だろう。足にまと
わりつく泥に動きを制限されてなお、イスカの疾走が巨人像の速度を凌駕していた。

「一つ聞く」

泥沼と化した地面を挟んで、土の星霊使いである少女と対峙。

「まさかとは思うけど、お前が氷禍の魔女という星霊使いか？」

「……はっ」

少女の応えは、嘲笑だった。

「好きに思うがいい」

地面が生き物のように蠢きます。三体目の巨人像？　そう身構えるイスカの予感に反し、まったく別のものが地面を突きやぶって飛びだした。

——土の鎧。

何十本という鋭利な投擲物が、地中から凄まじい勢いで射出されたのだ。

「ふっ」

一蹴りで巨人像の頭上よりも高く飛び上がって蜻蛉返り。迫る土鎧を、イスカはことごとく右の星剣で薙ぎ払った。

わずか一振り。

無数に打ち上がった鎧の中から、自分に突きささる軌道の鎧だけを瞬時に選別。それを黒鋼の剣で一刀のもとに斬り落とす。

「……星霊術を切断した!？」

魔女の声に困惑がまじった。

星霊が生成した土鎧は原始的な武器に見えるが、その実、土を固めた巨人像とは違い、こちらは地中の鉱物を固めた超硬度の金属塊だ。巨人像と同じ強度と違って油断すれば、その鎧先はたやすくイスカの身体を穿っていただろう。

それを一刀の下に斬りふせた。

しかも破壊ではなく、美しいとさえ言える切断面を描いての一刀両断で。

「貴様、その剣はなんだ」

「——星剣」

帝国最高権力者である八大使徒がイスカという兵に注目した理由。

それはイスカの剣士としての超絶的な技能はもちろんのこと、師からイスカが継承した一对の剣にある。

「黒の星剣は『星を遮断』する力がある。斬撃の位置とタイミングさえ合えば、あらゆる星霊の干渉を断ちきることができる」

「星霊の干渉を遮断?……はっ、そんな空言が通じるものか。そんな物があるならとつくに帝国全土で量産されている」

「造れない。コレがたった一つの真打だ」

「一介の部隊兵が、か？」

「帝国から支給されたんじゃない。剣を習った師から貰ったものだ」

「……………」

対の星剣を忌々しげに見下ろす少女。

信じ難いが嘘はついていない。イスカの瞳からそれを悟ったのだろう。その上で。

「ならば、その黒剣の対になる白剣にはどんな効果がある？」

「鋭いね」

星霊使いの少女の洞察に、イスカは素直に賞賛の声を上げた。

「答える気はない。ああ、だけど交換条件なら話は別だ。氷禍の魔女っていう星霊使いの居場所と交換なら構わない」

「……黙れ雑兵！」

ぴくりと片眉をつりあげる少女が、その小ぶりな口を大きく開いて吼えた。

「貴様など、あの方のお姿を目に映すことさえ許されない！」

「そう言うと思ったさ」

刃に付着した土を振り払い、イスカは土の星霊使いである少女めがけて駆けだした。

「だけど僕は、氷禍の魔女に用がある」

「……ふざけるな！」



少女の余裕は潰えていない。

「剣のみでいつまで耐えられる！」

巨人像の身体が碎けて無数の土砂へ。

さらにその土砂が空中で凝縮し、先と同じ土鎗となつてイスカの頭上へ降下。それを、イスカは視界に入れることなく黒鋼の剣で弾きかえた。

斬るのではなく。

星霊使いの少女へと弾きかえすよう狙いを定めて。

「バカなっ!？」

魔女と呼ばれる少女が巨人像の肩から飛び降りる。頬を掠めて通過していく土鎗に彼女が気を取られた隙に、イスカは彼女の距離を詰めていた。

「遅い」

少女が身をひるがえす先へと回りこみ、その首元へ剣を突きつける。

「……ッ! 貴様、いったい何者だ」

屈辱と驚愕に顔を真つ赤に染めた少女が、唇を噛みしめる。

背丈はイスカよりもわずかに低い。離れて対峙していた時の外見以上に、今こうして見る従者姿の少女は細身で華奢に感じられる。

自分と同一年くらいだろうか？

ふと頭を過ぎった思考。そんな雑念を振り払い、イスカは言葉を継いだ。

「お前の仲間の場所、教えてもらう」

「言わねばどうする？」

くす、と笑みをこぼす魔女。

「斬れ」

「……斬る？」

意識の外にあつた言葉を浴びせられて、思わず聞き返した。

「斬るがいい。私たち星霊使いと貴様ら帝国の犬は相容れぬ存在だ。捕虜になるくらいなら死を選ぶ覚悟はできている」

「あ……えっと、いや……」

「力づくで聞きたくば拷問でも投獄でも好きなようにしろ」

計算が狂った。それがイスカの正直な心境だった。

イスカの目的は氷禍の魔女ただ一人。闇雲に別の魔女を捕らえても、氷禍の魔女を警戒させてしまっただけだろう。

「どうした。斬れ！」

「……」
 埒が明かない。この場で拘束するか、それとも昏倒させて別部隊に引き渡すか。
 イスカの思考が少女から逸れた刹那。

「よくも敵の前でよそ見ができる……隙だらけだぞ！」

少女がスカートを引きちぎった。

否。彼女の衣装は最初からコレを想定して特殊加工を施した戦闘衣だった。

「布が目くらましに!？」

「剣で脅せば震え上がって動けないと思ったか？」

破いたスカートの布をイスカの剣めがけて巻きつけて剣を搦めとり、余ったスカートの生地で見界を閉ざす。

「私はアリス様の従者であり護衛。こうした近接戦闘も習得済みだ」

余分な生地を破きミニスカートとなった少女。

その手に握られていたのは折りたたみ式の短剣。戦地に似つかわしくない長大なスカートの下、太股のベルトに仕込んでいた暗器だ。

「消えろ！」

手にした短剣で斬りつける。鋭利な凶刃が布を斬り裂いて少年へ――

そして。

「……………っ!？」

従者の少女は、硬い地面にうつぶせに叩きつけられ組み伏せられていた。

「……ばか……なっ!？」

「油断しかけたよ。僕の剣をスカートの耐刃繊維で搦めとって、さらに僕の視界を封じて暗器で反撃か。星霊使いにこんな暗殺者の技術を習得した戦士がいたなんて」

いつ自分が組み伏せられたのか理解できない。そんな呆気にとられた少女の肩関節に力をこめながら、イスカはふっと息を吐きだした。

「星霊使いがまさか武器を使うなんてね」

「……そう思わせた奇襲を何事もなく退けたあげく、私を組み伏せるお前は何者だ」
 ざりっ、と奥歯を噛みしめる魔女の少女。

「さっきの質問を変える。いまアリス様の従者と言ったけど。アリスというのは？」

「……っ!」

少女の表情が変わる。

「まさかそれが氷禍の――」

「わたしの名前よ」

眼下の少女が発した声ではなかった。

では誰が？ 背後から響いてきた声に反応して振り返ろうとして。

……ぞくつ。

かつて経験したことがない。そう断言するに足る寒気を背筋に感じ、イスカは全てをかなぐり捨てて跳んでいた。

「教えてあげる。その身で味わいなさい」

『大氷禍』

ピシツ。

大気が、大樹が、地面が、視界全てが幻想めいた白霧に覆われた。

イスカの動体視力が、一瞬捉えた光景の後に、目の前の「世界」そのものが真っ青に輝く冷たい氷に閉ざされていく。

「痛っ!!」

首や腕に感じる猛烈な大寒波。氷雪混じりの風を浴びて、その一瞬後には手足が猛烈な震えに襲われた。

……この高さの空中に回避して、この寒気？

……地上はいつたいどんな寒さになってるんだ!?

シャリツ、と響きわたる氷の靴音。

樹海にできた氷の丘に立っていたのは王衣の少女。豪華なヘッドドレスで素顔を隠しているものの、その声は驚くほどに若かった。

「燐、ケガはないかしら」

「アリス様！」

従者服の魔女が、アリスと呼ぶ少女を見上げた。

イスカと対峙した時とは別人のように明るく朗らかな表情と声。単に星霊使いの増援が来たからというだけでは、こうも歡喜の反応は起きないだろう。

——絶対の崇敬と信頼。

——どんな苦境も絶望も、この主がいれば乗り越えられる。そんな表情だ。

着氷するイスカ。

「……冗談だろ」

吐息がまたたく間に白く輝く氷となった。

見わたすかぎりの地面が氷雪に覆われて、周りの大樹も茂みも、視界に映る全てのもの

が等しく氷漬けになっていたのだ。

さながら氷河期の再来。それもイスカが空中に回避していた数秒での出来事だ。いったいどれだけの冷気を放出すれば、こんな芸当が成しえるというのか。

……あの時に咄嗟に跳んでなかったら。

……僕も一切抵抗できずに氷の塊に閉じこめられていた。

「アリス様、お気をつけ下さい。あの男の持つ剣、どのような仕掛けかわかりませんが、星霊術を斬り裂いて遮断するようです」

「ありがとう燐。でも、それは些細なことでしょう」

「え？」

「今の一撃が決まっていれば剣も何も関係なかった。よく避けたものね」

燐と呼ぶ少女の頭を撫でて、新たな魔女が顔をこちらに向ける。

——美しい装飾に満ちた王衣。

——顔を隠すヴェール状のヘッドドレスもまた煌びやか。

燐という少女とは別の意味で、その姿は戦地にふさわしくない。あまりに目立ちすぎる衣装に、わざわざ顔を隠すためのヘッドドレスもそう。

自分がネビュリス皇庁の要人であると告白しているも同然だ。

「でも結果は上々。燐、よく時間を稼いでくれたわ」

「時間だって？」

「わたしの後ろに何があるかしら」

自らの後方を示す王衣の少女。

その奥。樹海にあるものが凍てついた光景の先に。

「……動力炉か!？」

イスカが目にしたのは、巨大な氷塊に覆われて凍結した動力炉だった。

遙か彼方に霞むほど離れているにもかかわらず、肉眼でもはっきりと視認できる。

あれほど無骨で厳かな兵器動力炉が、まるで水晶のような整った氷柱へと生まれ変わり、陽光を浴びてキラキラと輝いていたからだ。

それが――

「崩れなさい」

王衣の少女が放った一言と共に、まるで何かに踏み潰されたかのように歪み、変形し、そして崩壊の轟音を上げながら潰れた屑鉄へと変わり果てた。

「……最初からこれが狙いだったのか」

イスカは内心臍をかんだ。

ミスミス、ジン、音々が向かっている前線は今まさに星霊部隊と交戦中。イスカが立っている場所はその救援に向かうための中間地点である。

だが、敵の狙いは基地への直接攻撃だった。

「たった一人で帝国の戦略基地に攻めこんだっていいのか」

「何か問題でも？」

その王衣には、傷一つどころか土埃すら付着していない。

帝国基地には防衛部隊が控えていたはずだ。そこに魔女が現れたとすれば取り囲まれて銃弾の雨に晒されてもおかしくない。なのに……

「ああ、でも問題はあったわね。あなたという問題が」

神秘的なヴェールごしに感じる、冷たい敵意を孕んだ視線。

「本当ならあの拠点で捕虜を百人ほど捕まえて、最新の武器も手に入れて解析したかったのにできなかったわ。急いで引き返さなかったら憐が捕虜にされてたんだから」

「――」

「あなたは何者かしら。使徒聖でもない人間が憐を圧倒するなんて」

星霊使いの少女からの問いかけに。

イスカの選んだ答えは、宣戦布告とも言える返事だった。



「僕は、お前を捕らえるために来た」

「捕らえる？ 誰にモノを言っているのかしら。死よりも恐ろしい氷雪の痛みを味わいたくないのなら、あなたの方こそ——」

「降伏しろ」

「降伏なさい」

白く輝く世界で。

双剣を構えた少年と、王衣をまとう少女は同時にそう告げていた。

「……帝国の剣士、名前を聞いておこうかしら」

「イスカ」

対の双剣を握りしめたまま、イスカは素直に答えた。

使徒聖であれば名前を知られることで過去の戦闘データと照合されてしまう恐れもあるが、自分に関してその心配はない。

「お前は？」

「アリスリーゼ・ルウ・ネビュリス9世。もう気づいているでしょう？ 帝国が『氷禍の

魔女』と呼ぶ星霊使いは、わたしのことよ」

氷の丘の上に立つ少女。

ヘッドド레스によつて素顔は隠されているものの、樹海に響きわたる声は凜と透きとおり、気高き乙女を想わせる清廉さに満ちている。

「あなたが、ネビュリスの星霊部隊をたった一人で追い詰めたというのか？」

「お前が、帝国の兵器動力炉をたった一人で破壊したっていうのか」

そして、二人は同時にそう言葉を発していた。

「……そうだ」

鎮くイスカから離れた場所には、意識を失った星霊使い二人が眠っている。

「あなたは何者なの。天帝直属護衛の『使徒聖』ではなく部隊の隊長格でもない兵士が、どうやったらネビュリスの星霊部隊を圧倒できるのかしら」

「それはこっちの言い分だ。たった一人で敵の拠点に乗りこんだあげく、防衛を突破して動力炉を破壊するなんて……並の星霊使いにできるわけがない」

古代氷河期を想わせる寒気と氷雪に凍りついた樹海。

そのはるか後方に覗くのは砕けた兵器動力炉。鋼鉄製の装甲が、今まさに超低温と氷雪の圧力に耐えきれず崩壊していった。

……これが氷禍の魔女。

……たしかに、こんな大規模な星霊術は初めて見たかもしれない。

他の星霊使いとは次元が違う。同じ氷系統の星霊使いを十人用意しても、ここまでの規模の冷気を生成することはできないだろう。

だが、だからこそイスカは確信した。

これだけ強力な星霊を宿した氷禍の魔女は、間違いないネビュリス王家の血筋。それも現ネビュリス女王に限りなく近い身分の存在だ。

「お前は、いったい何者なんだ」

「あなたは、いったい何者なの」

機械仕掛けの理想郷『帝国』が鍛え上げた切り札——黒鋼の後継イスカ
魔女の楽園『ネビュリス皇庁』にて生まれた最高位の魔女——氷禍の魔女アリス。

その二人が、同時に動いた。

「壁よ、押しつぶせ！」

アリスの言葉と同時に、イスカの足場となっていた氷に亀裂。

ぱつくりと口を開けた氷の裂け目に足を取られたイスカに対し、前後左右からそり立つ氷の壁がイスカを潰すように迫りくる。

「……包囲か」

剣で切断するには巨大すぎる。

そう判断し、自分にもっとも早く迫ってくる氷の壁へとイスカは自ら駆けよった。

「自分から氷の壁に飛びこんだっ!？」

アリスの従者である燐が目をみひらくなか、身を屈め、イスカはスライディングの姿勢で氷上を滑走した。

——氷の壁と壁のスキマ。

迫りくる氷の壁の四隅が閉じきる前に、その外へ。

「そうだと思ったわ。燐を圧倒するならコレくらいは避けるでしょう」

素顔を隠すヴェールの下で、氷禍の魔女が不敵に微笑んだ。

「『氷禍・千枚の棘吹雪』」

「氷の剣？」

わざと逃げやすい空隙を用意し、そこに誘導させた？

イスカがそう気づいたのは、滑走した先に何百本という剣が輝いていたからだ。

氷上から。大気から。さらには凍てついた大樹の幹からも氷の剣が次々と生成されていく。

燐の作った土鎗は空中に回避した。だが氷の剣は、イスカの周囲を囲むかたちで生成されている。逃げ場がない。

「全方位におよぶ千の剣、避けられるものなら避けてみなさい」

星霊使いの少女が手を振り上げた。

「穿て」

イスカの頭上、横、下方から、驟雨のごとく氷剣が降りそそぐ。

回避も防御も不可能。ではどうする？

——問答無用で正面突破する。

両の星剣を構えてイスカは氷上を駆けた。

「はっ！」

黒の星剣を握りしめ、脇腹めがけて飛び来る刃を薙ぎはらう。

即座に身体をコマのように旋回。足下から生成された剣が戦闘衣の裾をあつさり貫く

気配を感じながらも、薄紙一枚の差ですり抜ける。

さらに前へ。

空中から生まれた剣を、左の剣の一振りで弾きかえす。

弾かれた剣が空中を渡って別の剣を撃墜。その合間も、視界の端に捉えた剣を右の剣で

横に薙いで、真後ろから迫る剣を、肌を感じる気配だけで撃ち落とす。

「——上！」

死角にあたる空間からの剣の生成と、それに対するイスカの感知。

そして迎撃にいたるまで一秒未満。その所作にいたっては後ろを見向きもしなかった。

空気の流れが氷剣の生成によってわずかに乱れる、その気流の変化。さらには氷剣そのものの冷氣を感じとっての咄嗟の反応だ。

「……凄まじいわね」

なかば呆れた表情で口にしたのは、他ならぬ氷禍の魔女アリス本人だった。

「だけどダメ。星霊は星の意思そのものよ。星霊を拒絶した帝国兵が、わたしわたしの星霊に刃向かえるわけがない」

イスカが撃ち落とした氷の刃は百本にも足りないだろう。

その百を撃墜するだけで限界だ。アリスの立つ氷雪の丘へとたどり着くどころか、逆に後方へと押し返されていく。

「ぐっ……」

一本、弾きそこねた剣の切っ先がイスカの右腕を斬り裂いた。

腕に走った痛みにイスカの集中力が一瞬乱れ、さらにその隙をついて左足の太股、脇腹、

肩、ありとあらゆる部位を刃が掠めていく。

「それが限界ね」

「いいや」

イスカの握る白鋼の剣に光が宿った。

燐と呼ばれた従者に見せた黒鋼の星剣は、あらゆる星霊の力を遮断する。そして対になるもう一つは――

「目覚めろ」

氷の剣。氷禍の魔女が星霊に応じて生成したものとまったく同じ氷の武器が、イスカのすぐ頭上にあたる虚空に生まれ、射出された。

「アリス様と同じ星霊術を!? 貴様……その力はいったい!」

「僕じゃない。この星剣の能力だ」

白の星剣が有する能力は『星の解放』。

――黒の星剣が、あらゆる星霊術を斬り裂いて。

――白の星剣が、黒の星剣が最後に斬った星霊術を一度だけ『再現』する。

瑠璃色の蒼光がイスカを照らした。

アリスが生みだしたのではなく、イスカが黒の星剣で遮断し、白の星剣によって再現

させた分の術式だ。

「九十七本。黒の星剣で遮断した分だけ、白の星剣はそれを解放する」

「そんな数で何ができるの。その程度じゃわたしの星霊術の相殺には程遠いわよ」

「相殺? 的外れだね。これは……」

頬の切り傷を手の甲で拭い、イスカは白の星剣を大地に突き立てた。

「お前に届くためだ」

射出される九十七本の氷の剣。アリスが生成したものと同形の剣が、イスカ目がけて襲いかかる剣を次々と撃ち落としていく。

――と同時に、イスカは駆けた。

氷の世界。

その中心に立つ氷禍の魔女へと一直線に。

イスカが撃ち出した氷の剣ではアリスの星霊術を相殺することはできないが、数秒間、

イスカが全力で疾走する時間を稼ぐことはできる。

「アリス様!」

イスカの狙いを察した燐が、反射的に主の名を呼んでいた。

氷雪の丘を駆け上がるイスカ。その凄まじい加速と疾走を前に、悠然と佇立していたア

リスが初めて身構えた。

「いい狙い……と言いたところだけど無駄よ」

右腕を前に突きだして指を鳴らす。

ギチッ、と音を立てて足下から生成されたのは世にも美しい鏡の盾だった。

「氷花」

硬く澄みきった音が、氷の樹海にこだまする。

「硬いっ!」

剣を振り下ろした体勢で、イスカは思わず表情を歪ませていた。

アリスの前に咲いた大輪の氷花に星剣が受けとめられていたのだ。あらゆる星霊術を遮断し、鋼鉄とて斬り裂く刃が。

「無敵の盾よ。帝国の大規模破壊兵器の火力だって封殺したわ」

「……攻撃も防御も万能か」

「ええ。だから、そろそろ諦めなさい!」

巨大な氷花から放たれた冷気がイスカを宙へと吹き飛ばす。

その落下地点を計算し、無数の氷剣を設置するアリス。だが——なぜ八大使徒が世界に一对の星剣をイスカに委ねたのか。その理由を、まだアリスは軽んじていた。

黒鋼の後継者と称された少年の「執念」を。

「……諦め………だって?」

上空に吹き飛ばされながらも、イスカは唇を噛みしめて言葉を発していた。

「ここで諦めたら、誰がこの戦争を止めるんだ!」

「——え?」

一瞬気を取られたアリスと憐が見上げるなか、イスカは、両手の星剣を目の前の大樹の幹へと突き立てた。

凍りついた木の幹に深々と星剣が突きささる。

幹を足場に三角跳びの要領で跳躍。さらに隣の木々へと高速で飛びうつる。

その超人じみた高速移動により、アリスがイスカの姿を見失った刹那。イスカは、無敵の盾である氷花を飛びこえてアリスの背後へと着地していた。

「なっ!」

水禍の魔女。そう恐れられた少女が驚愕の悲鳴とともに振り返る。

「蔓よ、拘束なさい!」

剣を振りかぶったイスカの足首に絡みつく氷の蔓。それはイスカが着地した氷土から伸びた蔓だった。

「なんてしつこいの……！ さつさと降伏するか倒れなさい！」

「そっちがだ！」

氷の蔓が全身に巻きつく前に、蔓を切断する。

その間。

星霊使いの少女は、氷雪の丘をさらに登ってイスカの間合いの外へと逃れていた。

「……アリス様が退いた？」

信じられないといった様子でその光景を見つめるのは憐だ。

イスカが氷の蔓を切り払っている間にいくらでも追撃の手段はあった。だがアリスは、そんな自分の優位を捨ててまでも距離を取ることを選択した。

——恐れたのだ。

——追撃した結果の逆襲を。

半端な攻撃はこの剣士に通じない。人外の動きでもって攻撃をかわし、隙あらば喉元に食らいつこうと攻めたててくる。だからこそ退くことを選んだ。

「バカらしいわ」

白く輝く吐息が、ヴェールの下の唇からこぼれ落ちた。

「馬鹿らしい？」

「あなたのことよ」

氷雪の丘からイスカを見下ろすアリス。

「何度勝ったと思ってもしぶとく生き残って襲ってくる獣……だからバカらしいと言ったのよ。わたしたちのことをさんざん魔女だ魔人だなんて言っておきながら、あなたの方がよっぽど人外の獣じゃない」

「……どっちがだ」

額にうきでた汗を払いながらイスカは答えた。

樹海を丸ごと凍てつかせる冷気に、帝国の大部隊をも壊滅させかねない無数の氷剣。

都市一つを容易に壊滅させる攻撃力を備えながら、こちらの攻撃は無敵の氷花によって阻まれてしまう。

「お互い様だろ」

「褒め言葉と受け取っておくわ。でも、わたしに退く気はない。あなたたち帝国を倒して世界を統一する野望は誰にも邪魔させないんだから」

「……世界統一？」

「侵略も迫害もない恒久の平和。あなたに理解できるかしら？」

こちらの反応が予想外だったのか、まんざらでもなさそうに少女が胸を張った。

「そうよ。それこそわたしネビュリス皇庁の王位継承 権者たるアリスリーゼ——つて、きやああああああつっつ!!」

胸を張って足を前に踏みだした途端。

その足先が氷の突起にぶつかって、魔女である少女が悲鳴を上げて転倒した。

「いやああああああつっつ!!」

「うわっ!!」

氷雪の丘を滑りおちてくる星霊使いの少女。

それをイスカは。

「……あいたた」

「だ、大丈夫?」

氷の坂道を滑りおちてきた少女を、反射的に受けとめていた。

「え、ええ、ありがとう……って、なっ、なな何をしてるの!」

「……つい」

条件反射で。

そういかけた言葉の続きが、イスカにはどうしても紡げなかった。

抱きかかえている氷櫛の魔女。その素顔を隠していたヘッドドレスが、落下の衝撃で外

れていたからだ。

「——え?」

その事実気づいたのか、アリスが自分の顔に手でふれる。

あらわになった少女の素顔。

それは、あまりに幻想的な美貌を湛えた相貌だった。

整った面立ちに凜とした表情。長く艶のある睫に、淡い紅色の唇。お伽話に描かれる姫

でさえ、この少女の前では霞んでしまう。そんな可憐な素顔。

「……………」

氷の世界で、まるで時間が止まったかのように互いに見つめ合い——

「っ! 見たわね!」

先に我に返ったのは星霊使いの少女だった。イスカの手を払って後ずさり、威嚇の形相で手を突きだして。

「わたしの顔、帝国に知られるわけにはいかないの! もう手加減なしだわ」

きつ、と歯を食いしばって睨みつけてくる星霊使いの少女。

「ここで決着を——」

「イスカ兄!」

仲間の声が彼方から響いたのは、その時だった。

「音々!？」

「イスカ君!　だ、だけどこの氷って!？」

続いて隊長であるミスミスの声。

「もしかして氷禍の魔女が近くに!?　ジン君、音々ちゃんも気をつけて。どこに敵が潜んでいるかわからなあああああつっつ!？」

「氷の上で走ると滑るぞ、って言う前に滑りやがったよこの隊長……」

あきれ果てた口調のジンの声、そして足音。樹海中が氷に閉ざされているせいで見通しこそこかないが、もうすぐそばまで部隊の仲間が戻ってきている。

その気配を察知して。

「……燐、撤退よ」

「で、ですがアリス様!?　この者の処遇は!？」

「動力炉は破壊したわ。敵の増援が来るとわかってるのに留まるのは危険よ」

氷雪の丘を駆けていく魔女二人。

燐の生成した土の巨人像に部下の星霊使いを抱きかかえさせて、自分たちは樹海の上から降下してきた怪鳥の背に飛びうつる。

「イスカと言ったわね」

帝国の誰にも知られていない素顔を見られたという恥辱と不覚に顔を赤く染めながら、ネビュリス皇庁の姫である少女が振り返った。

「今日だけは見逃してあげる。次はないと思いなさい!」

樹海にこだまする鳥の羽ばたき。

空へと消えていく怪鳥と少女二人の姿を見送って。

「イスカく——　ん、よかった無事だったんだね!？」

「わっ、隊長?」

幼げな隊長が、自分の姿を見るなり飛びついてきた。

「心配したんだから。平気?　ケガはない?」

「……ケガしてるかもしれない相手に飛びつくのはどうかと」

一方で。

音々とジンは、目の前にできた氷雪の丘を見上げて溜息をついていた。

「なにこれ。ねえジン兄ちゃん、これホントに星霊術?」

「噂どおり規格外の星霊使いらしいな。氷河期が通りすぎたみたいになってる。俺たちが合流した前線付近まで氷が押し寄せてきてた」

「……見てのとおりだよ」

氷漬こおりづけになった樹海もりを見回して肩かたをすくめてみせる。

「お前が星霊使い相手に傷を負うなんて何戦ぶりだ？ ケガ、消毒しておけよ」

「そ、そうだよイスカ君。手当てしなきゃバイ菌きん入っちゃう」

「はい」

とくん、とくんと胸を打つ動悸どうきを感じながらイスカは頷うなずいた。

……この動悸は？

……戦闘せんとうの緊張きんちよう。なんだろう。今までこんなことなかったのに。

それが戦闘での緊張がまだ醒さめやらぬせいか、それとも別の何かなのか、自分でも理解できないままで――

続きは、5月20日発売のファンタジア文庫で！